

ラスキン、ペイター、ワイルド

都築 佑吉

(群馬大学教授)

ペイター（以下Pと略す）は、アーノルド（A）、ラスキン（R）の思想を総合したが、特にRの印象的傾向を鮮明にし、批評の位置を高めた。ワイルド（W）はRとPの芸術主義を推進し、批評の自立を図り、『社会主義下の人間の魂』ではPの個性の完全な表現とRの社会的倫理を融合している。WはRとPを創造的な印象批評の大家とみなした。浪漫的唯美主義の流れを辿ると、RとPはキーツの美的人生観の代弁者となり、Wがこの思想を極端におし進めて実行したといえよう。WはPを踏襲して、経験自体を目的とし、人生の各瞬間に自己を集中する新快樂主義、芸術的人生を唱道した。PとWの審美主義はAの教養観から出発し、これに個性や主観を加味し、審美的教養、印象を内省する観照的生活をめざす点は共通であるが、WはPの個人主義と主観主義を一層顕在化し、Pの芸術観の道徳的側面を除去し尖鋭化したのである。またPは表現を第一にしたが、Wは内容を従属的位置においた。Pは内向的、消極的で謙虚であったが、Wは外向的、積極的で自負心が強かった。Pは行動しない「見る人」として人生を芸術化し、観照的生活を送ろうとしたが、Wは観照という行為をやめ、内面の世界ではなく、外界での人生の芸術化を目標として行動に移った。Pが自己の内的意識を探求したのに対し、Wは理想郷的な社会主義に傾斜した点で現実逃避の様態を異にするのである。Wは終生Pへの敬意を保ち続け、散文芸術の巨匠、一流の批評家として一目置いていて、『ルネッサンス』を精神と感覚の黄金の書、美の聖典と仰いだ。特に「結論」にもられた理想的瞬間を尊重する芸術至上の思想、「序文」での個人の印象の重視、「ジョルジョーネ派」での領外帰向の帰結としての最高の芸術形態たる音楽の位置づけは、Wの芸術観の基礎をなすものである。WがPからうけた影響は、ヴィヴィアン・ホランドや、ジェイムズ・レイヴェアの言をまつまでもなく、Rの影響を凌ぐものであろう。Rは中世ゴシック時代に憧れ、浪漫主義美学の宗教化、道徳化を企図し、Pはルネッサンスに魅惑され、浪漫主義美学の唯美主義化に向かったのである。『ドリアン・グレイの画像』についての書評で、Pは享楽主義についての誤解、作中人物の倫理感覚の欠如には難色を示しながらも、語りの巧妙さなどの独特な魅力を称揚している。WはPの助言に応じて、この作品の一部を書き直した。ウォットン卿はP、ホールワードはRを想起せしめる。PはWの童話を激賞し、グロウヴナー美術館の展覧会についての論評にWの将来性を認めたが、Wが感激したことは言を俟たない。WはPのモナリザ描写を創造批評の極致とみたが、「宿命の女」の系譜に、

ヘロディアスやサロメと共にこのモナリザを加えるのも一興であろう。Pの「エメラルド・アズワート」に『ドリアン・グレイの画像』との類似をみいだす者もある。また「セバスチャン・ファン・ストオク」の自己犠牲の投影を『獄中記』の苦悩に認めることもできよう。Pの影響はWの詩作にもあらわれているが、Wに散文を書くことをすすめたのもPであった。WはPの『想像の画像』の批評で、Pの文体が彫心鏤骨の余り自然さを欠くことがあるのを惜しみながらも、言葉の選択と省略の巧みさには感服している。『意向論集』ではPの文を寄木細工に喩えている。WはPの『鑑賞』についてもニューマンまで引き合いに出して好意的な批評を下している。Wの初期の作品では名前こそあげていないが、Pからの借用が多い。しかし『意向論集』を出す頃にはPの羈絆を脱して、独自の境地を開拓するに至った。晩年の『獄中記』は、クリスチャン・ヒューマンズム、人間的なキリスト観において『マリウス』と軌を一にしている。『マリウス』についてWは傍観者の態度を責めながらも芸術生活と宗教生活を調和させようとしたことを高く評価している。気質の尊重、自意識過剰、共感覚、因襲に対する反抗、ロココ風な情熱、男性美への憧憬、俗悪性よりの蟬脱、ダンディズム、宝石愛好、色彩感覚、サディスティックな描写、ニューマンの洞察を利用した美の宗教という考え、先見性、純粋性など程度の差はあれ両者に共通であった。WとPは浪漫主義と象徴主義、ひいては現代文学の懸け橋なのである。本稿で筆者は土居光知、西脇順三郎、井村君江、伊藤勲、富士川義之、本間久雄の諸氏の言葉を多少表現を変えて借用した。紙面の関係で出典を明記できなかったことを遺憾とする。その他、ヒラリー・フレイザー、矢野峰人、前川祐一、矢本貞幹、山川鴻三、河村錠一郎、山川学而、竹林章、沼田宣子、小川和夫、土岐恒二の諸氏からも種々示唆を受けた。

ワイルドの〈純粹・自立〉文学観

——ラスキンとペイターのあいだで

玉井 暲

(大阪大学助教授)

若い頃、特別知り合いになりたい人が二人いて、それはペイターとラスキンであった——このようにワイルドが自ら語ったと、オーサリヴァンは伝えている（『ワイルドの諸相』、136頁）。事実ワイルドは、1874年のオックスフォード入学を契機に、この二人と親